

講師は、恵泉女学園大学名誉教授であり、現在、国際日本文化研究センター客員教授である ^{い そんじょん} 李 省 展 氏(第 40 期生として入学、1 年のアメリカ留学後、第 41 期生として卒業)

在日コリアンの歩みと川崎一共生社会の実現を目指して

川崎における共生社会の実現は桜本を中心とする在日コリアンの動き、それに応える行政の努力、さらにグローバルな人権の流れが結実したものである。それらが呼応して世界的にも注目される先進性が形成されてきた。桜本での動きには「自分を愛するように隣人を愛せよ」というキリスト教の精神があり、社会福祉法人青丘社設立を実現させたが、当初からコリアンと日本人との共生が謳われている。日立就職差別裁判、公営住宅の国籍条項撤廃、指紋押捺拒否運動、ヘイト・スピーチに反対する運動の中で、共生の輪は着実に拡大していった。

共生を歴史的に考察していくと、3・1 独立宣言書(1919 年)の「人類の共存共生」にそのルーツの一端がみられる。また、第二の開国と言われた「内地雑居」(1899 年)時に作成された双六には外国人との共生をめぐる豊かな民衆の想像力を見ることができる。明治時代には混合民族論が主流であった。日本と韓国・朝鮮に単一民族神話は残存するが、富山県作成の「逆さ地図」をみると、大陸との豊かな交流が実感できる。周辺の台湾、中国、ロシアなどが多民族国家・地域であることからすると、北東アジアの一角だけが単一民族であるのは不自然である。

親日・反日という硬直化した思考から脱却し、ニューカマーの増加という現実の中で、個々人がどのような未来への夢を描きながら他者と共に歩むのが問われている。

